慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セイモア・ メルマン 棉業南部に於ける産業革命
Sub Title	
Author	平賀, 健吉
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.11 (1951. 11) ,p.700(74)- 702(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19511101-0074
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511101-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

狹さ」、進取性、不撓不屈さ、事業上の見識、販賣術、有能な共同者を拔擢する包容力、權限の委託、動く組織の中での忠實さを起させる能力等である。之等を一身に具える事は容易でないが、然し之等のうち缺けるものが多い程更新實行者として失敗する。トマス・エディスンの如き例外を除けば、ド・フォレやヘッセンデンの如く、幾つかの之等の才能を有していても、發明家と經營者としての才能が同時には働かないといふ例は少くない。かのマルコニも多くの才能を有して居たが、それでも經營者としては最初は失敗している。

第二次產業革命を迎へて、何れの產業にも新な創造の無限の可能性が滿ち滿ちている。「見聞の廣い經營」「型にはまらない企業」の時代には、進取的な視野のない「科學的經營者」が出現せねばならぬが、其は仲々難しい。將來の科學的經營者は、適切な時期に新な發展に加わる能力によつて認められ酬いられるであろう。彼の主な仕事は更新の舵をとる事である。彼の企業の色々の面に影響を與える底流を十分知つておく爲には專門家が必要である。そして生產費――價格の關係の決定は彼の部下に委ねてしまつてよい。

（中村勝己）

セイモア・メルマン

『棉業南部に於ける產業革命』

(Seymour Melman, "An Industrial Revolution in the Cotton South." The Economic History Review. Second Series. Vol. 2. No. 1. pp. 59—72)

現在棉業の王國たる米國南部に於ては、封建的農園の殼を打破り產業資本主義が壓倒的と成りつつある。奴隸制に代つて行われた從來の手工的な栽培法も小作制度も、今や機械とそして賃勞働者に依つて取つて代わられようとしている。而もその變革が南北戰爭後に見られた外部からの强制に依るものでは無く、農園主自身の手で自發的に行われてゐる事は注目に値する。低い市場價格に絕へず壓迫される傾向にある彼等は、從來の生產性の低い手工的勞働から拔け出し、その工業化の爲に努力する必要に迫られたのである。正に南部棉業は現在產業革命の唯中に在るといつてよい。

併しこの變革が容易なものとは考えられぬ。尨大且つ複雜な工業化を計劃するには先ず廣汎な技術及市場の研究が必要である。それに應えて米國下院農業委員會は一九四七年六月「棉業地帶の農業的經濟的諸問題の研究」に關して證言を求めたが、農園經營主の團體たる全國棉業會議を初め各種團體は二年前より準備に掛り、諸證言は期せずして棉業問題のあらゆる專門的研究を一堂に會する事となつた。それ等證言は、農業經營の能率化、綿の市場豫想、海外市場の擴大、工業化に伴う教育衞生計劃等の課題と共に、一九四五―六五年に亘る農園の工業化及び失業者を救濟すべき新都市の工場・住宅建設に要する資本の推定額、並びにそれに伴い農村より地方都市に吸い上げられる勞働者の推定數等を擧げてゐる。今此處には證言に現われた所を中心として南部工業化の過程に就いて考察しようとする。

一、綿の市場狀態――近來人絹・紙・ナイロン等の出現と共に綿は漸次その使用範圍を狹められ、殊に織物部門に於ては合成繊維の脅威を受け漸く年々の販賣額を維持するに止まつている。價格の點でもポンド當り綿三〇セントに對しレイヨンは二五セント、尙一五セントに迄下る可能性がある。世界市場に對しても米綿の占める割合は顯著に減少している。即ち、一九三〇年は六五％、四一年に至り三八％と低下。その上、低賃銀・低費用の印度・中國の綿と、戰前は日・獨・伊の人造繊維に壓迫せられて輸出額も遙に減少した。戰後世界的な繊維不足に乘じ綿業も活況を呈し滯貨を捌いたが、今後內外市場での競爭と他合成繊維との競爭に備えて品質の改善と價格の引下げを圖るのが目下の急務である。ではその價格即ち生產費の引下げに機械化は如何に作用するものであろうか。

二、勞働費用と機械化――一九三〇年代、減作計劃に則つて、農園主はその小作人を追出す一方、政府より得た金で各種機械を購入した。かくて農園の平在面積の增加にも拘らず農村人口は却つて減少さへ示した。當時は播種、刈取には人力を借りねばならなかつたが、之も土地を失つた小作人を季節に使用する事に依つて容易に補い得た。所が一九四〇――四五年に亘り西部及び北西部の兵器工場へ彼等が流入してから事情は急變し、勞働力の不足と同時に賃銀の上昇を見、三〇年代に比し七倍に迄騰貴した。斯樣に勞働力の面からも完全な機械化は生產費を低下せしめる爲に有利であり、又必要ともされるに至つた。

三、刈取の機械化とその技術的効果――棉業機械化の根幹を爲す刈取機も一九三〇年代に於ては餘り使用されていなかつた。之は機械の構造自體に不備な點が多かつたと云ふよりは、寧ろ生產費の點からその必要が認められなかつたものと考えられる。第二次大戰後急激にその需要を增大し、同時に機械による收穫物の品質も改善された。即ち技術的にも機械化は棉の生產費の低下を可能ならしめている。

四、機械化に依る費用の節減と生產單位の規模――一九四五年當時刈取に要する費用はポンド當り人力で七・六セントに付くのに對し、機械を以てする時は一・四セントにしか當つて居ない。其上今後の機械の普及や技術の進步を考える時、生產費の低減は益々著しいものと成ろう。

この他方農園經營の規模とその形態にも大きな變化が見られる。即ち一九三九年米國に於ける棉業農家の數は一六〇萬にのぼるが、その約半數は年間產出高四ベール（一ベールは約五百ポンド）以下の小農業が占めている。この程度の小農はエーカー當り年間最高〇・三九ベールしか收獲出來ぬが、之に反して年產五百ベール以上の農家に於ではエーカー當り一・一二ベール

ルを收獲し得る。この樣に單位面積當りの收獲量は耕作單位の增大するにつれて多くなる傾向が有る。之は機械作業の優れて居る事を表わすと同時に、一農園當りの農地面積が廣ければ廣い程機械作業に便であり高能率を得る事を物語つている。この結果から、全國棉業會議は耕作單位の擴大と農園の集中統合化を主張している。事實最近の國勢調査によれば一〇％の農家が四〇％の收獲を上げている狀態にある。從つて經營技術も變化し一般產業のそれに近づいて合理化が必要となつて來た。現在協同組合、共販組合も多數設立せられて効果的に運營されつつあり、經營の內容自體も工業化に卽應した方向にあるのを見る事が出來る。

五、勞働問題——南部棉業の機械化に一つの影を投げかけているものに勞働力の問題がある。耕地面積が減少した上に一人當りの生產力が上昇した爲、一九四五年以降の十年間に二〇〇萬以上の人口が職を失うであろうと推定されている。その轉換・吸收は可成り困難を伴う問題である。一方必要とせられる勞働者の性格自體も從來とは異つたものと成つた。新しい機械を使用する爲にはそれだけの敎育が必要であり、又その爲には高い生活水準を維持する必要が生ずる。その點に就き一九四七年全國農業勞働組合は「南部勞働者は機械化が顯著に成ると共に著しく組合の努力に應える樣になつた」とその進步を認めている。併し小農家は土地も資本も少く機械・技術に缺けて生產力も劣り高い生活水準を維持する事は難しいから脫落せざるを得ない事と成る。とは云え彼等を無秩序に閉め出す事は危險であるから、その吸收を漸次にする爲南部に併行產業を興す事が最も望ましい。但し現在、政府もその計劃に着手するに至つていない。勞働問題を如何に解決するかは南部工業化の今後に掛つた大きな課題である。

結語——從來棉業に於て一定の收入を得るには、小麥の五倍、玉蜀黍の三・五倍の勞力を必要としていた。棉業の機械化が凡ゆる意味でその樣な不利な事情を消滅し、その生產費を低下せしめ、價格を引下げ得る事は今迄述べた所である。そしてその價格引下げへの要望こそ南部棉業者をして機械に趨らせた第一の要因であつた。最初に述べた樣に世界市場・國內市場に於て外國棉及び合成纖維との競爭の激化が豫想される現在、南部棉業は今後益〻栽培の機械を圖る必要に迫られ、棉業は工業化を通じて近代產業の形態に變貌して行くと考えられる。又それに伴つて南部自體も全般的な產業化に向うであろう。

（平賀健吉）

編集後記

○　每度のことであるが、學會機關誌の編集のむずかしさをいまさらながら痛感せざるをえない。その「むずかしさ」は學會機關誌の編集がいわゆる「雜誌」の編集とその本質を異にするところに由來するといえるのではなかろうか。とすれば、それは結局、學會の機關誌なるものがいわゆる「雜誌」に對してもつ性質と意義との差異に關することとなるであろう。

○　學會の機關誌は廣く內外の研究者を對象としているとともに、それはその學會の研究發表の機關である。このような點からいえば執筆者は同時に編集者であるといつて差支えないであろう。ここでは、編集委員會は、丁度農業勞働が稻や麥の生育、結實に外からはたらきかけるように、研究者の勞作を一册の雜誌にまとめあげるという點にその「主體性」の發現する場をみいだすのである。そういつたからといつて、編集委員會が自ら編集の責任を囘避するというのではもちろんない。いわゆる「編集後記」がその「雜誌」をつらぬく編集の意圖や編集者の問題意識を展開することを通念とするとするならば、これは「編集後記」を書くに當つていささかの自己辯解にほかならないのである。

○　講和をむかえて、戰後および講和後の日本經濟の動向については、誰しも深い關心をよせるところであろう。本號には、先頃おこなわれた京濱工場地帶の實態調査についての森助敎授による分析をのせることが出來た。なおそれとならんで、講和後の日本經濟の諸問題について、伊東敎授の論稿を豫定していたのであるが、長文のため次號に掲載するのやむなきにいたつたことを諒とされたい。

（小池基之）

昭和二十六年十月二十五日印刷　第四十四卷
昭和二十六年十一月一日發行　第十一號

本號定價七拾圓
送料四圓

禁轉載

編輯兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平
印刷者　東京都港區芝三田豐岡町八　川口芳太郎
印刷所　東京都港區芝三田豐岡町八　圖書印刷株式會社

豫約購讀料一年分　金八四〇圓（送料共）
半ヶ年分　金四二〇圓（〃）
豫約購讀料は發行所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件、營業に關する用件、販賣申込も發行所へ願います。

發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室內
慶應義塾經濟學會
日本出版協會員B一一一〇一六